

グローバルな視点と能力を培う社会科授業の創造

Teaching of Social Studies to Develop Global Perspectives and Abilities

社会科

秋山寿彦 中村文宣 長谷川智大 藤木正史
古家正暢 前田陽子 山本勝治 津山直樹

はじめに

開校以来、本校社会科では、6カ年を通して、次の2点を目標として学習を進めてきている。

- (1) グローバル化が急速なスピードで進む今日、国際社会の一員として、現代社会の課題に興味関心を持つ。
- (2) 現代社会の課題を地域で生きる自分の生活と結びつけ、多面的・多角的に考え、自分のことばで表現していく力を培う。

この目標を実現するために、以下のような教育活動に取り組んできている。

1. プロジェクト研究

社会科（後期課程：地歴科・公民科を含む）では、本学のプロジェクト研究のテーマとして『グローバル社会を生きる視野と能力を持つ児童・生徒の育成をめざす社会科授業とカリキュラムの開発』を掲げ、附属小学校と連携して、「国際」をキーワードとする小学校・中等教育学校12カ年一貫教育カリキュラムの開発に着手することとした。

数年前から、双方の児童・生徒の作品を持ち寄り、子どもたちの成長のあゆみ・証のようなものを確認してきたのだが、本プロジェクトでは、子どもたちの成長を感覚的に確認するだけでなく、一步踏み込んだものをめざすこととした。

本校はもちろん附属小学校においても、日常的に海外教育体験生徒と関わるができる教育環境にある。しかし、このような環境にあるからといって、自然に「グローバルな視野と能力」が子どもたちに身につくとは限らない。やはり、社会科教師が、さまざまな社会事象に対して問題意識をもち、教材開発・カリキュラム開発にあたらなければならないと考える。

最初に手がけたのは、地理的分野における「アフリカ」学習である。なぜアフリカかと問われるならば、2013年に TICADV (Tokyo International Conference on African Development) が開催される。アフリカは私たち日本に住む者にとって「遠くて遠い国」である。ゆえに、さまざまなステレオタイプのアフリカ像が、まことしやかに語られる。それだけにアフリカ学習を通して、アフリカの真実の姿に一步でも近づくことができる学びの場が必要であると考えた。

1-1. 附属小学校の取り組み（6年生での実践）

下記の三つの目標を掲げて授業を行った。

- 内容知：「世界の国々の様子」の中で、アフリカの人々のくらしの様子を知るとともに、国際社会の一員として国際協力が必要であることをつかむことができる。
- 方法知：写真や統計資料、ゲスト・ティーチャーの話をもとに意欲的に調べ、調べたこと

を根拠にして話し合いを行い、自分の考えを深める。

○自分知：お金や物といったものの他に、「持続可能な協力」という観点から国際協力のあり方について考えようとする。

具体的には、アフリカの人々のくらしのようすを、DVD を視聴して身近に感じるようにし、書籍を読んだり・インターネットを検索したりして調べ学習を積み上げていった。これらの基礎的な知識を身につけたうえで、アフリカ現地でフェアトレード等の農民支援を行う NPO 団体の代表をゲスト・ティーチャーとして招聘し、子どもたちのアフリカ理解を深めようとした。

1-2. 本校での取り組み (1 年生での実践)

アフリカをさまざまな資料<地図・景観写真・カルトグラム(統計的事実を地図上に表現した各種の図形)・新聞記事・映像・書籍・音楽・民族衣装等>から読み解いていくこととした。授業実施を10月とし、世界から貧困をなくすために私たち一人一人が立ち上がろうと考える世界同時イベント「STAND UP TAKE ACTION」に合わせることにした。この学習経験を通して、アフリカンフェスタ・グローバルフェスタ等のボランティア活動に積極的に参加する生徒を育成することとした。

	学習活動	教師の発問 Q と説明● と 予想される生徒の反応△	留意点
導入 10	☆アフリカのイメージを共有する。	Q.「アフリカ」というコトバからイメージすることをイメージマップにまとめてみよう。 △ライオン・キリン・砂漠・ジャングル・黒人… ●スライドでアフリカのイメージを確認しましょう。	◇心身をほぐすために実施する。
展開 I 15	☆アフリカの広大さを確認する。 ☆アフリカの多様性を確認する。 ☆アフリカをカルトグラムで見よう。	●アフリカ大陸の広大さを確認しよう。 Q.日本とほぼ同じくらいの面積の国は… Q.日本の何倍くらいあるのだろう… △ 50 倍 100 倍 … ●アフリカの多様性を確認しよう。 Q.アフリカの国の数は… いくつくらいあるだろう… △ 10 30 50 70 … ●スライドを見ながら、アフリカを気候区分に従って縦断してみよう Q.アフリカの多様性を感じとることができましたか… どのような点に最も多様性を感じましたか… △大きい さまざまな気候 黒人ばかりではない… Q.アフリカをカルトグラム(変形地図)で見ると、どのようなことに気づきましたか… △ 穀物の生産量が少ない。 農産物の輸出はほとんどない。	◇地図帳で、しっかりと確認作業をさせる。

展 開 II 15	☆MDGs（ミレニアム開発目標）を知る。	Q.MDGs（ミレニアム開発目標）というコトバを聞いたことがありますか… ・ 貧困や飢餓をなくそう ・ 小学校に通えるようにしよう ・ 性による差別をなくそう ・ 赤ちゃんを守ろう ・ お母さんを守ろう ・ 病気を防ごう ・ 環境をよくしよう ・ 世界の人々で助け合おう	◇MDGs をわかりやすく解説する。
終 結 8	☆本授業の Essential Question の提示	<本授業の Essential Question> ●世界から貧困をなくすために STAND UP TAKE ACTION に参加したいと考えます。 Q. アフリカの貧困を終わらせるために、あなたならではのアクションを考えてください。	◇貧困をなくすための方法を当事者意識をもって考えさせる。

社会科における「グローバルな視野と能力」とは、さまざまな地球規模の社会事象について問題意識をもち、広い視野から考察する力を持つことであり、また、異なる立場の他者と積極的に関わり、多様な意見を尊重し議論できる力を持つことである。社会科の学習を通して、このような力を培うため、これからも附属小学校をはじめとした研究協力校と連携・協力しながら、子どもたちのグローバルな視野と能力の育成に邁進していきたいと考えている。

2. 第3回 公開研究会を振り返って

2012年6月に開催された第3回公開研究会では、私たちの教育研究の成果と課題を明らかにしたいと考えた。そこで、社会科としては、4本（中等2年：歴史／中等5年：世界史A／中等5年：地理A／中等6年：政治経済）・ESDとして3本（中等1年：津波／中等2年：国際協力／中等3年：沖縄）の授業を公開した。このためか、分科会は活発なものとなり、設定されていた時間では足りなかった。分科会終了後も、各授業担当者と個別の質疑応答が遅くまで行われた。

ここでは、参会された先生方から出された代表的な質問に対する回答を記録にとどめることとする。「社会科における『グローバルな能力』とは何か…」という問いに対する答えとして、不十分であるかもしれないが、私たちは次のように考える。

科目・領域・担当教員によって、何を「グローバルな能力」と捉えるか、少なからずニュアンスの違いが出てくる。そこで、私たちは、敢えて概念的な用語を用いて総括的に定義するのではなく、個々の科目や領域において想定される「グローバルな能力」を、それぞれの具体的な学習場面において、明らかにしようと考えた。そこで、敢えて7つの授業を公開することにより、各授業者が「グローバルな能力」を、どのように考え、どのような場面で「グローバルな能力」の育成を図っているのかを、それぞれの公開授業を通して、お伝えしたいと考えたので

ある。1998年公開の映画「踊る大捜査線 THE MOVIE」で、青島刑事が叫んだ言葉「事件は会議室で起きてるんじゃない！現場で起きているんだ！」を地で行く実践を行ったつもりである。アレコレ理屈を捏ねくり回している時間があつたなら、一人ひとりが具体的な学習場面において、「グローバルな能力」を追究し、その授業実践を俎上にのせ、参会された先生方のご意見・ご指導をいただく中で、自分自身の糧としていく。このように積極果敢な姿勢こそが、グローバルな時代を生き抜いていく社会科教師に必要なことではないか。今後の公開研究会の際にも、この積極姿勢を貫いていきたい。

最後になり大変恐縮ですが、この7本の授業すべてにわたり、懇切丁寧にご指導いただいた成田喜一郎先生（本学教職大学院教授）に心より深く感謝申し上げます。

*公開研究会の各授業は下記のとおりである。

学年	教科・科目（領域）	担当	授業のテーマ
1	社会（ESD）	古 家	「津波てんでんこ」こそが持続可能な社会を築くのか…
2	国際教養（ESD）	藤 木	国際協力・ボランティアするときに大切なこと
3	社会（歴史）	秋 山	近代の日本と世界—人々の生活と地域の変化に注目して—
3	社会（ESD）	古 家	沖縄の持続可能な未来を考える
5	世界史 A	山 本	戦間期の世界—第二次世界大戦の原因を探る—
5	地理 A	中 村	ツーリズムが地域に与える影響
6	政治・経済	長谷川	日本の国際協力

3. グローバルな視点に基づく授業

3-1 ブータンを通して考える「幸せの指標」（2年：藤木）

JICA 教師海外研修の成果還元の一環として、ブータンを素材とするワークショップ形式の授業を行った。Unit Question を「幸せは何によって決まるのか？」とし、Goal を「みんなの“幸せ指標”をつくろう！！」とした。ブータン在住日本人という設定でクラス全員参加の朗読劇ロールプレイを行い、ブータンの抱える問題を共有した後、夏休みの課題とした GNH（Gross National Happiness）に関するエッセイなどを使用し、生徒間の対話を促した。その後、クラスの幸福度数をはかるポスター作成を班ごとにわかれて行った。

3-2 バングラデシュの大学生：アンジャリ・シャルカルさんを迎えて（5年：秋山）

バングラデシュで貧困撲滅活動といえば、貧しい人々への少額融資を行うグラミン銀行（ムハマド・ユヌス）がよく知られているが、これと並ぶ存在として BRAC（Bangladesh rural advancement committee：バングラデシュ農村向上委員会）がある。シャルカルさんは、この委員会のボランティアメンバーとして、日本ではあたりまえと思われている公衆トイレ「女性が誰でも使えるトイレ」の建設に尽力している。女性が社会に進出しにくいイスラム社会にあって、大学生でありながら積極的に社会貢献活動に携わる姿を知り、本校の生徒も大いに刺激を受ける経験となった。生徒からは「人口が多く、宗教も多種多様なバングラデシュにあって、コミュニケーションを取っていくことは難しいでしょう…どのような点に配慮しているのですか」等、異文化理解に関する質問が数多く出さ

れ、充実した交流授業となった。

3-3 ベラルーシの中学生：エリセイ・ビリュコフくんを迎えて（3年：古家）

1986年、旧ソ連（現ウクライナ）のチェルノブイリ原発事故による放射性降下物が、ウクライナ・ベラルーシ・ロシアを汚染した。あれから26年が経過したというのに、ベラルーシでは新生児の85%が何らかの障害をもち、子どもの癌発症率が13倍にもなっているそうだ。ビリュコフくんの学校にも「チェルノブイリ・ハート」¹の子どもをもつ母親が来校し、手術費用の募金を依頼された。ビリュコフくんは募金はもちろんのこと一日一日を悔いなく生きることが大切であると学んだという。同じ中学生・同じく放射能汚染の問題に苦しむ仲間として、お互いの意見を真剣に聞き入っていた。チェルノブイリ・フクシマという「負」のつながりではなく、未来を切り拓く「国際人の卵」としてのつながりを確認する交流授業となった。

4. 現代社会の課題を自分のことばで表現していく力の育成「新聞投書（生徒版）」

4-1 新聞投書への誘い

投書は評論家のような立場で書かれた文章ではありません。そこでは生活者としての書き手の関心のありようが日常的な視点から語られています。毎日の生活の中での小さな発見から政治や経済といった大きな問題まで、さまざまな話題が書き手の体験や生活実感を通して身近な問題として語られています。投書を読むことで私たちは自分たちの社会の「今・ココ」と出会っているということが出来るかもしれません。

4-2 投書欄をのぞいてみよう！

(1)はじめに新聞の投書欄を3日分読んでみる。

(2)特に印象に残った投書の一つを選んで、想像を膨らませる。たとえば…

- ・投書を書いた人は、どのような人物なのだろう…
- ・その意見は、どのような体験や事実に基づいて述べられているのだろう…
- ・その書き手の発想の新鮮さ、感性の鋭さはどこからきているのだろう… 等々

4-3 実際に新聞投書（文字数は400字～500字程度）を書く

(1)何について書くのか

普段の生活の中で「気がついたこと」「気になってしかたがないこと」はないか…。あるいは「これって、やっぱりおかしいのではないか」と違和感を覚えたことは…。多くの場合、素通りしてしまうのですが、ちょっと立ち止まって考えてみよう。たとえば…

- ・自分が気づいたことに、どんな意味があるのか…
- ・なぜ、そのように感じたのか… 本当はどうしてもらいたいのか…

⇒ その時の自分の気持ちや体験の意味を掘り起こしてみよう。そこにはささやかではあっても自分にとって切実な問題が見つかるはずです。もしかしたら、自分以外の人にとっても大切な問題であるかもしれません。投書を書くことの意義は、私たちの日常生

¹ 通称チェルノブイリ・ハートとは、穴のあいた心臓。生まれつき重度の疾患を持って生まれる子ども
マリアン・デレオ監督「チェルノブイリ・ハート」アカデミー賞・短編ドキュメンタリー賞受賞 2003

活を掘り起し、そこから大切なものを発見するというところにあります。

(2)投書を書くための留意点

ア. 書き手の立場を明確にすること

投書は不特定多数の人に向けて意見を述べるという表現行為です。つまり読み手は投書を書いた人について全く知らないことが前提です。ですから、まず自分の立場・立脚点を明らかにすることが大切です。

イ. 意見や主張を支えるだけの事実や体験が提示されていること

意見や主張、訴えたいことが明確であるだけでなく、それらの妥当性を支えるだけの事実や体験が的確に提示されていることが必要です。そうでないと文章が観念的なものになってしまい、著しく説得力を欠いたものになってしまいます。

ウ. わかりやすい文章を書くこと

投書は自分と同じ世代だけではなく、さまざまな年齢の人に対して広く理解を求める文章です。しかし、だからといって、無理に背伸びして難解な文章を書く必要はありません。誰にとっても読みやすく、わかりやすい文章であることが大切です。

エ. 内容にふさわしい題をつけること

題を見ただけで、投書で主張したいことが、ある程度類推できる題をつけます。

オ. 最後に

誤字・脱字、文のねじれがないかどうかを最終点検します。

* 朝日新聞「声：若い世代」 10週連続掲載の快挙

断続的に生徒の投書は各新聞に多数掲載（年間 100 本に迫る勢い）されていたのだが、朝日新聞の投稿欄「声・若い世代」に 10 週連続（2012 年 10 月 27 日から 12 月 29 日）で掲載されたことを下記に紹介する。

10.27.	ドイツンコーヒーでタイを支援	1 年	Y.A.
11.03.	障害者にやさしい踏切に	1 年	N.K.
11.03.	自転車のマナーをよく知ろう	1 年	I.M.
11.10.	ゲーム熱中 祖父母に謝りたい	1 年	M.A.
11.17.	政治への関心持とう若い世代	4 年	S.K.
* 11.22.	ガザに見た沖縄戦と同じ悲劇	3 年	N.E.
11.24.	カナダの異文化に触れて考えた	5 年	I.M.
12.01.	福島に美しい空を取り戻して	1 年	I.M.
12.01.	盲導犬の来店、拒否しないで	1 年	F.Y.
12.08.	トンネルの信頼関係を急いで	3 年	F.M.
12.15.	修理屋さんに思う祖父の言葉	1 年	S.A.
12.22.	ひいおばあちゃんの戦争体験	1 年	H.A.
12.29.	沖縄が抱える悲しさ忘れない	3 年	S.T.

文責：古家正暢

Teaching of Social Studies to Develop Global Perspectives and Abilities

Since day one, the social studies class at TGUISS has sought to achieve the following two objectives through the six years of learning:

- (1) As members of the international community, students should acquire an interest in the challenges facing contemporary society marked by accelerating globalization.
- (2) Students should develop the ability to think from various perspectives and express ideas in their own words, making connections between the challenges facing contemporary society and their own life in the local community.

To this end, we have been involved in the following educational activities.